

第 1766 回 (11 月 17 日)

農業の産業化現象における

技術的背景とその社会学的意義

立 川 雅 司

アメリカ農業などに典型的に見られるように今日の農業生産においては、契約農業による垂直的統合や、大規模企業の経営への集中化、生産・加工・流通各局面でのグローバル化が進んでおり、こうした現象を総称して「農業の産業化 (industrialization of agriculture)」と呼ぶ。こうした産業化現象については、主に農業経済学分野から様々な検討がなされているが、本報告では、まず産業化現象の近年の特徴に関して概観すると共に、「農業社会学」の観点から産業化の意義を明らかにする分析視角について試論的に提起した。

(1)アメリカでは、ほとんどの作目で垂直的調整(契約やインテグレーション)が増大しており、従来は例外的であった生鮮野菜や豚でも顕著な増大が見られる。穀物でも契約形態で微増傾向にあり、全農産物の3分の1以上が、何らかの垂直的調整の下で生産されているといわれている。こうした現象はこれまでもアメリカ農業の特徴として指摘されてきたところであるが、質的な面で新たな動向として指摘できるのは、特に品質面での改良やバイオテク等技術開発が契機となって垂直的調整が進行していることである。その具体的事例として挙げられるのが、分別管理システム(identity-preserved system, IP)である。IPシステムとは、農場段階から、流通・加工段階を経て最終需要者に到るまで、すべての段階を通して、当該農産物の特性(identity)を他と異なったものとして維持(preserve)する垂直的調整システムを指す。

近年のバイオテクノロジーの発展は、以上に見たような産業化現象に拍車をかけている。とりわけ重要な点としては、バイオテクによって改良しようとしている作物特性の対象

がインプット特性(除草剤や農薬など投入資材の節約や効率化に資する特性)からアウトプット特性(品質や日持ち性などの改善に資する特性)へと重心が移るにつれて、その改善成果が、IPシステムでの取り扱いになる傾向が見られることである。

(2)こうした産業化現象は、農業生産における生産者の立場や、フードシステムを構成する主体間の関係に関して、どのような意義を有するのであろうか。こうした点に関して、報告では、近年アメリカで展開されている「農業社会学」を援用しつつ、産業化現象の意義を社会学的に捉える際の分析視角をいくつか提起した。その主な論点としては、①生産者の意思決定にもたらす影響、②リスクの性質変化、③生産技術情報の取得形態の変化、④フードシステムの再編リーダーの変化等の分析視角であり、こうした観点から産業化現象の意義と今後の検討課題を論じた。具体的には、垂直的調整に伴い生産者が意思決定できる範囲(生産方式や市場)が限定されることや、従来の市場リスクから契約をめぐる関係リスクへとリスクの性質が変化することに伴うコンフリクトなど、生産者が受動的な環境に置かれる可能性がある。また公的普及機関ではなく、契約企業による閉鎖的な情報提供が生産情報として不可欠になる傾向があることや、川上に位置する生産資材供給企業が、IPシステムを通じてフードシステム再編リーダーとして登場することで、従来の農業生産をめぐる主体間関係が大きく変化する可能性があることなどを指摘した。